

〔台記〕久安四年十月五日己未、已刻參女院謁禪閣。○賴長父忠實日來禪閣賜玄象令修理給、今日召權大納言宗輔卿、相議被著柱、藤原資定役其事先余。○藤原賴長以笙吹雙調調子、禪閣以箏調同調、後著之、禪閣曰、納言辨清濁勝于余、納言謝曰、愚臣未及禪閣之科、何勝乎、又曰、今日預議道之面目也、

〔古今著聞集公三事〕抑大監物周光は、近き比の詩學生の中にきこる有ものにて、參りたりけるが、歳八十ばかりにて、階をのぼることかなはざりけるを、大藏卿長成朝臣、春宮大進朝方弟子にて有ければ、前後にあひえたがひて扶持したり、ゆゑ、しき面目とぞ世の人申ける、周光もことに自讚しけり、

〔古今著聞集興言利口〕武正野○下は、容儀などもよかりければ、ゆゑ、しき名譽の者にこそ侍ける、競馬をたび／＼仕けれ共、一度も勝ざりけり、負ながら、かたへ、歸り寄て、洒肴などおこなひければ、またしき者共、いかにかくは有ぞといひければ、競馬にまけたるものは、死にうするかといひて、あへて用ゐざりけり、武正ならざらんものかやうの事、てんや、

〔參考源平盛衰記十三〕高倉宮信連戰附高倉宮籠三井寺事

長門本云、○中略則信連ヲ搦テ、六波羅ヘイテ參、宗盛卿大ニ嗔テ、○中略疾々河原ニ引出シテ首ヲ切レトゾ宣ケル、侍共口々ニ申ケルハ、弓矢取者ノ手本御覽候ヘ、角コソ有ベケレ、信連ハ度々高名シタリシ者ゾカシ、一年本所ニ候ケル時、末座ノ衆事ヲ出シテ狼藉ニ及ブ間、共ニモテ聞ユル剛者ニテアリ、諸衆等力及バズシテ、一臈二臈座ヲ立テ騒合ケルニ、信連寄テ是ヲ靜ムルニ叶ハザリケレバ、信連ツト寄マ、ニ、二人ヲ取テ押ヘテ、左右ノ脇ニ挾テ座ヲ罷出、狼藉ヲ靜メテ高名其一也ト聞エシ者ゾカシト申セバ、又或侍申ケルハ、其次ノ年ト覺ユル、大番衆共ガ留兼テ通ケル大和強盜六人ヲ、信連唯一人シテ寄合テ、四人ヲバ直ニ打留メ、二人ヲバ生捕ニシタリシ勸賞ゾカシ、兵衛尉ハ毎度ハガ子ヲ顯シタリシ者ゾカシ、カ、ル名譽ノ者ヲ頓テ切レン事コソ不便ナ